

# 山と、人と、自然と

山崎清憲氏（県山岳連盟会長）



私は、自然の残ったところに登って行く願望にかられ、現在まで山登りを続けてきました。もう十年になりましたが、特に還暦をヒマラヤの四千坪のベースキャンプで迎えたことは、感慨深い思い出です。

最近、自然が破壊されているとよく言われますが、山に行けばまだまだ美しい自然は残っています。健康のため、気分転換のため、皆さんもぜひ山に登ってもらいたいと思います。

四国を見ると、中央には四国山地が連なり、その中に西日本で一番高い石鐘山（一九八二坪）、二番めの剣山（一九五五坪）があります。そして、一八〇〇坪級が二十くらい連なっています。

高いということは、なかなか人間が取り付くことができません。しかし近ごろは開発が進み、石鐘山の例をとっても、一五〇〇坪の土小屋まで道路ができ、瓶ヶ森に

は林道がつき、あつという間に登れるなど便利になりました。その裏には、木が切り倒され、排気ガスが充満するという付録も残ってきています。反面、足の弱い人などみんなが、山のすばらしさを知ってもらえるようになったとも言えるでしょう。

自然というのは、放っておくのが良いのか。自然を破壊しない限度において、手を加えていくのが良いのか。私は、自然というものは案外、人間が手を加えないと生きてこないと考えます。

たとえば、西能漢谷の山桜はだんだんと減っていますが、あのまま放っておけば、やがてなくなってしまうでしょう。苗木を植えるなどの手立てをしなければ、あの美しさは永遠には続きません。

自然は、人間が少し手を加え、保全してやる必要があります。私たちは自然を愛し、そして自然の懐に飛び込みます。自分の人間性を振り返るには、自然の中

でなければなりません。子供たちには、自然を友として活動させることが大切です。自然の中で物事を考え、自分の歩いている道はいつころひかれた道で、どこからどこへ通じているのだろうかと思えることは、とても興味深く楽しいことです。

私は現在、古い道について調べています。国府に通じる道が官道になるわけですが、一番最初の道は大坂から徳島へ渡り、瀬戸内海を通り愛媛県を回り、宿毛、中村を通って国府にきたものと、私は考えています。びつくりするほど遠い道のりです。二番めに古いのが、松山から御坂峠を越えて久万へ出て、美川から池川を抜け黒森を越して土佐に入る道。三番めが、野根山街道か、物部村の四ツ足峠を通る道ではないかと思えます。歴史学者の中には、四ツ足峠越えが、一番古いと考えている方もいます。

一番新しい官道は、大豊町の立

川を通る道で、江戸時代は参勤交替の道として利用されています。このように、古道に関する文献をあさり、土地の人々の話を聞き、紀貫之はいったどこから土佐に入ったのか、そんな思いをしなが

ら歩くことは、楽しいことです。昭和四十一年、私が野根山街道に入ったときは、大やぶで宿屋杉もまったく見当たらず、岩佐関所の跡もどこやらわからずじまい。今は四国の道としてりっぱに整備されており、古い道がこのような復元されることは、うれしいことです。

最近、物部村の県境の四ツ足峠越えの道を調べました。峠に四ツ足堂というお堂があることから、このように呼ばれたもので、支える四本の足のうち二本が阿波藩、残り二本が土佐藩にあり、修理には両藩が話し合っただと書物にも出ています。しかし、それより以前の地検帳にも載っていることから、室町時代からそのお堂があり、人々の交通の安全を祈願するために作られたものとも考えられ

ます。また、この峠をささむ石立山、行者山とも修験に關係した山であり、お堂もそれに関係していたのではとも考えられ、もう少し調べてみたいと思っています。

最後に、幻の雪道について。宝暦年間、土佐藩の下級武士が、本川村の寺川という集落に山廻り役人として赴任。そこでの興味深い生活を日記に綴ったのが「寺川郷談」といわれ、大変貴重な民俗資料です。

その中に「領家郷に雪道残り。今はとどまりてそのことなし」という箇所があります。手箱山に氷室があり、掘り出した雪を旱飛脚でお城下まで献上していた、その道が残っていたという話です。しかし、それはどこをどう通っていた道なのか手掛りがありません。私は次のように考えています。氷室は、手箱山の一五三〇坪の北斜面にあり、そこから頂上にかつぎ上げ、筒上山との間の手箱越を通り大滝神社に奉納。宝米山中を下り安居氷室社に納め、続いて吾北村の高禊氷室社に納め、鏡村小山の氷室天神社を経て、いつきに高知に運ばれたと思います。

この道は、今はだれもが行ける道ではなく、もともと山を歩き、この雪道が幻ではなく、現実の雪道となるよう、調査を続けたらと思います。